

近代日本女流文學の發生

前期の形成をめぐって

朴 京 薫

〈目 次〉

- | | |
|-------------|--------------------|
| I. 序 | 4. 女流作家の出現 |
| II. 本 論 | 1) 女権運動と文学 |
| 1. 社会的背景と文壇 | 2) 「藪の鶯」の発表と群小女流作家 |
| 2. 女性の教育 | 5. 近代前期女流文学の形成 |
| 3. 女流文学の育成 | III. 結 論 |

I. 序

日本の女流文学は中古という特殊な社会と政治を背景に創造され隆盛をむかえた。その女流文学は「もののあはれ」や「をかし」「みやび」などの文学理念をつくりあげて今日の日本文学全体の基底となり底流となつて生きているのである。

そのような華麗なる文学の歴史を残して、次の時代の鎌倉幕府以降の封建時代には、女流文学は質、量ともに殆んど影をかくすようになった。

特に江戸時代は、封建的男尊女卑のもつとも徹底した時で、専ら夫を主人と敬い仕え、家事に専念するを奨励する規定のために女子の学問や文筆をこととするようなことは望めるものではなかった。

1868年 明治維新となつては近代的文明開化、啓蒙、欧化主義などによる社会 恋革が起り、自由民権、人間平等を提唱する目まぐるしい新時代をみざすようになって来た。当然の要求として女性の啓蒙、地位向上、女権拡張も主張され、女流文学の誕生をみるようになった。しかしその誕生は明治二十年（1887）ごろとみななければならない。明治二十年代は男性の文壇ですら戯作風な小説から近代的文学へと革命が行われる黎明期であつたからである。数百年來の封建残滓の残る当時の社会に女流文学が發生したことは一面徴々たる存在にみられるものであつたらうが、男性のする文学の道に参加していく勢いの強さを見せていたことは事実であつた。

明治の特殊な時代に發生された日本女流文学は一世紀を歩んで来た今日に至つては、

「今や女流の側から、女流だからというこわばりで主張をする必要はなくなってきたし、また受取って下さる男の側からも、広い意味での人間の文学として考えて下さるような状況ができてきた。」¹⁾

という現代女流作家自身の言葉と変って来た。また男の作家も女流はもはや性を離れた知的なものとして優秀性をみとめようとするのである。

「もはや女流文学は男性作家への傍を流れる片々たる細流ではないのである。(中略)いずれも彼女たちはいまや強引に小説の内容と物語の幅を広げようとしている(中略)現在は、もしかすると知的な面においても女の方が生き生きとしているのかも知れぬ…」²⁾

というように現在の日本女流文学は位置づけられていつている。

拙稿はその女流文学の原点とみられる明治初期の女流文学の誕生とその形成過程をめぐって新しく発生した日本女流文学がいかに形成されその特性を作りだすに至ったかについて追求していきたいと思う。

Ⅱ．本 論

1. 社会的背景と文壇

明治維新のいわゆる近代社会は市民の社会であり、自由主義的な民主主義精神に貫かれていなければならなかつたのである。その社会を形成する経済機構は資本主義であつて、そこに生きる近代人は封建的身分の拘束から解放された自由平等でなければならないというのがそのスローガンであつた。

このような意識のもとに、いままで鎖ざされていた島国の生活は急速に「海外文化追つき運動」へと向けられたのである。

外勢の威脅のもとに鎖国を解いたその当時から日本はそれら列強の壓力に対抗することのできる国力の養成が至急であることを痛感したのである。それには西洋文明の移入を行い、移入される文明は模倣し、日本に適したものに作りあげることであつた。西洋文明といつても、第一に力を入れ

1) 「女流をつき動かすもの」座談(川村二郎・高橋たか子・津島佑子)「国文学」学燈社 25巻 15号, 1980. P.8.

2) 秋山駿「いま女流文学とは何か」(「国文学」学燈社 1980.12) P.124.

るようになったのは軍備の近代化であつた。西洋人が「黒船」に大砲を載せて江戸城に向けて来た時に、日本としては、武器の移入と技術が第一の至急なる要求であつたことは当然であつたろう。

その他、政治・経済・工商学においても同じく国家のためになるものであれば何でも歐化ということになつた。

このような物質的功利主義に走るようになってから教育の改革による人材を養成するのも至急な問題となつた。文明開化の役人にするためにはあらゆる部門の書物の解説と、それによる技術その他の文化移植が要求されるからであつた。またすぐれた国家公務員の養成も同じく必要不可欠のものであつたことはいうまでもない。

このように目まぐるしく功利主義に走っていったために、文学の近代化というものだけはたやすくなされるものではなかつた。

日本文明開化に大役割を果たした福沢諭吉は近代社会の形成のために「学問のすすめ」（1868～1877）を著作し、その冒頭に「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず…」と記して人間の平等をのべてはいるが、その平等は学問の有無によつてきまるものだともいつている。

また諭吉は、「世上に実なき文学」のようなものでなしに、「人間普通日用に近き実学」でなければならぬとも力説した。

近代化啓蒙を主張する諭吉も文学に対してだけは否定していたことがわかる。

かような明治社会における文学が西洋化、近代化にブレーキがかけられていた当時、仮名垣魯文（1829～94）織田純一郎（1851～1919）末広鉄腸（1849～96）東海散士（1852～1922）矢野龍溪（1850～1931）などの作家達は、

「いずれも新時代に対する本質的理解を欠き、しかも一方においてそこに盛られた諷刺や否定は浅薄なもので、その卑俗な滑稽は、毒にも薬にもならぬ娯楽…」³⁾

に過ぎないものであつたといわれるような、いわゆる戯作的に政治的社会相を反映した、余技的なものにほかならなかつた。

ところが1885年、坪内逍遙は、東京大学文学士の肩書で、「小説神髓」という文学論と小説「当世書生氣質」を書いて発表した。坪内逍遙の小説や文学論の発表は当時の文学に大きな影響をあたえた。実際にそれ以前は文学に従事していた人に、文学士という最高学部の出身はいなかつた。彼の文学論によつて、

3) 中村光夫「日本の近代小説」岩波書店 1976. P.15.

「明治の社会のなかで 文学に他の西洋輸入の新文明と並行する生存権をあたえたことで、ちよ
ど科学がそれ自体として価値あることであるように、文学にそれ自体として価値を（他の何事に役
立たなくとも）みとめねばならぬという主張を、教養ある社会に納得させた…」⁴⁾

という文学における価値観の革新がなされたのである。これにより始めて近代的小説の形成を目
ざすこととなり、その影響は、二葉亭四迷や山田美妙を生みだし、また江戸戯作的系統の尾崎紅葉
や幸田露伴をも生み出した。その他に女流小説「藪の鶯」（1888）にあたえた影響をここにあげ
ねばならぬと思う。

田辺龍子（後の三宅花圃）は逍遙の「当世書生気質」を読んでそれを手本に女学生気質的な小説
「藪の鶯」を書きあげた。これは新しい女流文学の始めを飾る小説の誕生であったのである。

1886年は欧化思想の絶頂に達していた時であったが、翌1887年になつてはもはや時勢の変化が
起り始め、国権論の高唱など国家主義へと政治的には安定期に入るようになっていた。

かような時代にその社会相を反映した「藪の鶯」は、当時としてはいかにも珍しい女学生の生
態の描写という特色を持つてあらわれてきた。それは目まぐるしいまでに展開されていった啓蒙運
動と功利のための教育政策による知識女性の出現がもたらした結果でもあった。いわゆる女流文学
は女流たる特色を持つて男性と共に足をふみだしたことになったのである。

しかしその後、逍遙の唱えた写実を目ざして活発にはたらきだした男性の文壇形成や作品制作の
積極性には満たぬものとなりつつも群小女流文学の流行を作つてはいたのである。

2. 女性の教育

東京府の六個所に小学校が開設され義務教育が行われたのは1870年であった。

これによつて女性にも男性と同等の教育が行われるようになり、同時に知的女性を生み出す基盤
が設けられたことになった。

キダー英語塾（フェリス女学院の前身）が三人の塾生を持つて開かれたのは、1870年（明治3
年）のことであるが、これが日本の女子教育の先駆をなしたことになる。

官立東京女学校が1872年（明治5年）に、女子師範学校が1875年にと、官公私立の女学校が増
加開設されていった。それまでの時代には想像もされないほどに女子の教育が漸次普及されて「女
学生」という若い知識人が世間の目をひくようになって行つた。

文教卿森有礼は、女子の教育に特に熱意を持つた、一夫一婦論を説いて女権拡張を唱えた開明主

4) 中村光夫「明治文学史」筑摩叢書9, 1979. P.95.

義者であつた。また森有礼は欧化主義政策を強力に推進した人で、広瀬阿常と契約結婚の先例をも開いたものである。

1885年(明18年)には「教育の根本は女子教育にあり、女子教育の挙否は国家の安危に係するを忘るべからず」⁵⁾と主張して日本の女学生を文明国なみの知的女性に改造しようとした努力が次のようなところから察しられる。

「高島田に薄化粧で礼式の稽古を強制されていた女子師範の生徒に洋服を着用させることが定まり、洋楽と舞踏が正規のカリキュラムに加えられた。外国語の教育が重視されたことはいうまでもない。(中略)先生から男女の自由な交際を積極的にすすめられ、寄宿舎の応接室にはわかにか青年学生の出入りが目立つようになった。」⁶⁾

そういう欧風の教育と生活様式が極端にまで取り入れられたのは、当時の「鹿鳴館時代」⁷⁾に象徴されるようにあらゆる面に於て「改良」主義を試みていた時期であつたからである。

「国語国文の改良を目指した『かなの会』『ローマ学会』などはその頃結成されたものでありそのほか、住宅改良会、衣服改良会、男女交際改良会、風俗改良会(後略)」⁸⁾

などというものもあつたし、森有体の「混血による人種改良論とか、日本語を廃して英語を国語とすべしというような突飛な議論」⁹⁾というのも一緒になつての教育風調であつたようである。

学問においても男性中心の日本の教育が女性にも及び「天文、地理、歴史、動植物などの新しい知識にふれ、社会現象や自然現象に理解を持つ」⁹⁾ようになったし、英語やフランス語を自国語のように駆使しようとした。

「嬢等は庭訓今川の何物たるを知らずして只だ専ら英文佛語を我国の文章言語の如く使用せんとして勉強す」と「女学雑誌」(明治20年9月)第76号の社説にいつている。「女学雑誌」は女学流行の時代に女性総合雑誌として、全国の10代後半の女性とその読者層となつていたものである。

「中島湘煙などの女権拡張の主張、女性問題に関する啓蒙書や翻訳書の出版、さらに、女性の地位の向上、権利伸張、女性の幸福をはからんための『婦女子に関する一科の学問』を授けようと意図して出発した」¹⁰⁾

5) 前田愛「橘口一葉の世界」平凡社 1978. P.35.

6) 前田愛「橘口一葉の世界」平凡社 1978. P.35.

7) 明治16年(1883)鹿鳴館の開館から閉館の20年で、約5年間

8) 中村光夫「明治文学史」筑摩書房 1979.PP.98~99.

9) 杉本邦子「女学生」(国文学解釈と鑑賞 至文堂 1968. 4月 特集号) P.83.

10) 「国文学」学燈社 1968. 4月特集号 P.83.

というのが『女学雑誌』（1885）の創刊主旨であつてみれば、それは学校教育と並んで多くの刺激と教養を与える女性教育にほかならなかつた。つまり、知的女性の輩出をはかる大啓蒙の役割にもなつたといえる。

新時代となつて目まぐるしい女性の新教育、教養はかくの如くにして造られ、知的女性は輩出されていくようになったのである。

3. 女流文學の育成

女流文學の発生は、女性の教育水準の向上や女性解放のテーマの熱心な啓蒙教育の雰囲気という環境の中にあつたといえるが、もう一つは、直接的な女流文學の奨励や發表舞台を設けてくれたマスコミ、いわゆる文芸雑誌の役割の大きかつたことにもあると思うのである。そういう意味において『女学雑誌』ならび『文学界』は女流文學育成の功をなしたものであつた。

先きにふれたが『女学雑誌』は、1885年7月22日に創刊されて1904年1月15日第525号（以後は未詳）まで続いた女性総合雑誌であつた。創刊は近藤賢三によつて編集されたものであつたが、1886年5月第24号から巖本善治が編集にあつた。巖本善治はキリスト教者で明治女学校の教頭であつた。彼の主張する女性啓蒙、女性の地位向上などのイデオロギーは強く『女学雑誌』に現れていて、キリスト教的な女性教育に大きく貢献したものであつた。それは結局は、女流作家の育成の役割にもなつたことである。

「巖本にとつて『女学』とは女性の地位と権利とを向上させるための一切の學問を意味し、『女学』を教えることによつて女性の幸福をたたかひとることが彼の目的であつた。」¹¹⁾

彼の終始一貫守られて来た啓蒙精神に一般は神様のような存在と思つていたのであつた。

初期の『女学雑誌』には女性の文筆によるものは中島湘煙の論説しか掲載されなかつた。

まもなく若松賤子の紀行文「舊き都のつと」（1886年）が發表されるようになって、女性の作品がふえてくるようになる。

湘煙の論説は彼女が演説をして女権を唱えた当時のような果敢な主張は抑制されていたとはいえ、女子教育の普及や家庭内における婦人の地位向上や男女の自由交際などがくりかえしテーマとして掲載されていた。このような湘煙の論説は女性の啓蒙や教養への貢献という役割であつたとともに、女性の文學という、女流作家養成の一環とみることもできる。

11) 吉田精一「日本女流文學史」（近世・近代編）同文書院 1975. P.142.

巖本善治は、ほかに若い青年内田魯菴（1868～1929）や石橋忍月（1865～1926）などを『女学雑誌』の文芸時評の新人として育成して、文芸分野を華かにした。彼等の評論は明治21年（1889）から22年末まで、毎号の如く掲載されたようである。巖本善治自身も文学論争を起こして、啓蒙家と文学家との対立の場を提供している。このような新人養成や文学論争などの文芸活動は、女性読者に文学的関心をあたえたことになった。

若松賤子（1864～1896）はアメリカの宣教師キダ塾（後のフェリス女学校）で西洋人と起居を供にしながらキリスト教的アメリカ式の教育をうけている。19才で高等科を卒業しては宣教師格の待遇で母校の英語の教師となった。後巖本善治と結婚（1889）して、「小公子」（1890）の翻訳を発表、次々と創作や翻訳を『女学雑誌』に発表していった。若松賤子における『女学雑誌』は他のどの女流作家よりも出世の足場となった雑誌であった。

いわゆる女流作家若松賤子は『女学雑誌』によりつくりだされたといえるのである。

また三宅花圃も『女学雑誌』には多くの作品を発表している。このように『女学雑誌』は女性啓蒙の目的としてその役割を果たしていくうちに、新知識による新しい女流文学の出現にも母台的な役割をなしていたのであった。

『女学雑誌』は1892年6月になって白表紙と赤表紙とに別れた。

白表紙の方はやや文学的なもので、赤表紙の方は巖本善治の持ちつづけて来た女子啓蒙の基本性格的なものであった。

『女学雑誌』白表紙の方は、星野天知が編集することになっていたが、彼は別に『女学生』（1890年5月創刊）という雑誌をも編集していた。『女学生』は「キリスト教主義女学校を加盟校とした生徒の作文を掲載する文学教育的性格をもった…」¹²⁾雑誌であった。

星野天知は『女学生』と白表紙とを総合して『文学界』（1893年1月～1898年1月）を創刊した。それに集る同人は、星野夕影、平田禿木、北村透谷、島崎藤村、戸川秋骨、馬場弧蝶、上田敏などの若い文学青年達であった。彼等は赤表紙の方の巖本善治の思想を功利的啓蒙と見て反対し、芸術的情熱的な詩文や議論を重んじて、それらを掲載していき、近代的自我の拡充や封建的殘滓の打破などを主張した。

『文学界』創刊の際、執筆者陣の中には、三宅花圃と若松賤子が入っていたが、若松賤子は『文学界』同人と夫の巖本善治との不和のために執筆せず終った。花圃もあまり投稿しなかつたことから、客員の資格の樋口一葉だけが独舞台の如く『文学界』に投稿しつづけた。一葉は「雪の日」（1893年3月）を初作として「たけくらべ」（1895年1月～96年1月）の連載が終るまで数多くの作品を『文学界』に発表していったが、作品「たけくらべ」を一括『文芸倶楽部』に掲載（1896

12) 小川和佑「一葉と明治の女流文学」（国文学 解釈と鑑賞）至文堂 1974. 39巻13号 P.64.

4)して、幸田露伴(脱天子)・齊藤綠雨(登藤坊)・森鷗外(鐘禮舎)の絶賛を得た。評論誌「めざまし草」は、

「前略・唯だ不思議なるは、この境に出没する人物のゾラ、イブセン等の写し慣れ、所謂自然派の極力模倣する、人の形したる畜類ならで、吾人と共に笑ひ共に哭すべきまことの人間なることなり。われは作者が捕へ来りたる原材とその現じ出したる詩趣とを較べ見て、此人の筆の下には、灰を撒きて花を開かす手段あるを知り得たり。われは縦令世の人に一葉崇拜の嘲を受けんまでも、此人にまことの詩人という称をおくことを惜まざるなり。(後略)」¹³⁾

これは森鷗外の評であつたが、当時続出して来る女流作家のうち一葉がその粋をなしていたことの現れである。

樋口一葉のその他の名作も、「にぎりえ」「十三夜」「やみ夜」は『文芸倶楽部』に、「うつせみ」「そぞろごと」は『読売新聞』に「わかれ道」は『国民の友』にと集中的に発表していった。

そういった集中的傑作の期間(1895～96)を和田芳恵氏は「奇蹟の期間」(14ヶ月)と呼んでいる。

樋口一葉の奇蹟の期間が作られたのは。

「幸作の死によつて知つた暗い血の流れが一葉を追いつめて、追いつめられた一葉が現実を追いつめて奇蹟の期間を作つた。」¹⁴⁾

と和田芳恵氏はのべている。一葉の従兄、幸作の死は遺傳的の疾病であつて、一葉自身もその死を身近に感じていたからであつたということである。

そういうせつばづまつた思いであつてこそ奇蹟的な傑作時代が作られたとは当然考えられることである。しかし文学界同人たちの若く刺激的な西洋思想の影響や作品発表の舞台などが提供されなかつたとしたら、一葉の文学は今日のような形にはなれなかつたことであつたとも思う。

要するに『文学界』は近代前期を代表する女流作家、樋口一葉を育てあげたといえるのである。

4. 女流作家の出現

1) 女権運動と文學

女性の新教育による基本知識やキリスト教的女子教養の啓蒙などによる女子の知識水準の向上、

13) 岡田八千代校註「たけくらべ・にぎりえ」角川書店、1973.PP.245～246.

14) 村松定孝「評伝・樋口一葉」(国文学 解釈と鑑賞)至文堂、1974.11 P.134.

それに加わる作品発表の舞台提供は新しい時代の女流作家を誕生させ養成して来たといえる。

明治10年代の政治的自由民権運動が盛んになって行く時、岸田俊子(後の中島湘煙)という妙令の女性が女権を唱えて現れた。中島湘煙は京都の裕福な呉服商の娘として幼い時から才媛といわれて育った。新教育制度のスタートを切りつつ中学校をでては特に漢詩文の才能が認められるようになり宮中に召されるようになった。当時の宮中は、

「税所敦子や平尾歌子(後の下田歌子)などの女流歌人が召し出され、若く総明な皇后をめぐつて平安朝をおもわせる文学サロンがつくられようとしていたのである。」¹⁵⁾

中島湘煙は皇后の孟子講義をうけもつて入宮(1879)したが、平安朝の文学サロンのような雰囲気とは名ばかりであつたようである。宮中の女房たちは聡明な人々ではなく「無知と迷信にこりかたまつた」¹⁶⁾息ぐるしいものであり陰謀や男性遍歴などのむずかしい人間関係の中にあつたようである。そういう宮中の雰囲気に疑問をいだいた湘煙は、1881年(明治14)健康を理由に宮中を辞した(当年18才)。それからは、自由民権運動に参加、女流演説家として華々しく活動を展開した。湘煙は男女同権、女性の目覚めを要請し男性の壓制を告発する女権伸張を唱えた新しい女性にほかならなかつた。1882年から1883年10月頃まで、母をともなつた遊説旅行が続いたが大津四の宮劇場での「函入娘」の演説が政府の言論や集会の抑壓を諷したものと誤認されて投獄された。一週間の獄中生活であつたけれど、出獄しては、演説を断念して文筆生活に入った。

「同胞姉妹に告ぐ」(1884年5月～1885年6月、『自由燈』)は湘煙の最初の筆になつた演説でもあつた。その演説調の一部を引用してみる。

「今試みに世の自由を愛し、民権を重んずる諸君に問ん。君等は、社会の改良を欲し玉へり。人間の進歩を欲し玉へり。人間の進歩を謀り玉へり。而して何とてこの男女同権の説のみに至りては、守旧頑固の党に結合なし玉ふぞ。嗚呼世の男らよ。汝等は口を開きぬれば、改進を云ひ、改革と云ふにあらざるや。何とて独りこの同権の一点においては、旧慣を慕ひぬるや。俗流のままに従ひぬるや。我が親しく愛しき姉よ妹よ。旧弊を改め習慣を破りて、彼の心なき男らの迷ひの夢を打破り玉へや。」¹⁶⁾

かような果敢なる提唱は彼女の筆による最初の作品であるだけに、聴衆に呼びかける演説を思わせるものであつた。文章もかたい漢文調のものである。その後も論説はひき続き書かれているが1887年には「善悪の岐」1889年には「山間の名花」という小説が発表された。これらは当時の政治社会を反映させた政治小説でもあり、彼女が一貫して主張した男女平等観や恋愛観のあらわれで

15) 前田愛「樋口一葉の世界」平凡社 1978. p.9.

16) 作品「同胞姉妹に告ぐ」より。

あつた。いわゆる尊敬しあう對等な関係にある夫婦の愛情を描いたものであつた。

坪内逍遙の「小説神髓」による「当世書生氣質」という近代文学の改新といったものとは、湘煙の作品はもとより縁の遠い物、隔てのあるものであつた。

しかし中島湘煙は、近代という時代に教育され開化されて自由民権運動という流れに伍する女性の権利や平等を主張した女性啓蒙の先駆的役割をなしあげた。

また小説も書いてその社会の政治的影響を反映させるなど中島湘煙は近代女流作家の始めを飾ったともいふべき存在であつた。

2) 「藪の鶯」の發表と群小女流作家

坪内逍遙の「小説神髓」と「当世書生氣質」(1885)の發表は文学の價值観に一革新をもたらしたことは、既述の通りであるが、坪内逍遙の、

「文学というものが従来ながく考えられてきたように宗教や道徳の宣伝普及のための方便的な具ではなく、文学は文学自体に存在の意義をもつ」¹⁷⁾

とする考えから従来は下劣賤業とみられていた小説を自ら書いて論じたことは世間に並みならぬ衝撃となつたことである。

田辺龍子(後の三宅花圃)は、東京高等女学校の在學生であつたが、坪内逍遙の「当世書生氣質」を読んで、「これなら書ける」という気がまえて、女學生氣質的な小説「藪の鶯」を書きあげた。当時としては男性の文壇も実際において坪内逍遙の「当世書生氣質」と二葉亭四迷の「浮雲」(1887.6～1889.8)の他には男性の新しいスタイルの小説はまだ書かれていなかった。

「藪の鶯」の内容は、極端な自由と欧化主義の浜子が、官員で家へ出入りする山中と誤ちにおちいる。ケンブリッジ大学の留学から帰ってきた浜子の婚約者、篠原は浅薄な欧化主義に批判的になる。浜子との結婚を断念した篠原は平編物の内職をしながら弟に学問をさせ、自分は和歌を習っている松島秀子と結婚する。

内容からしても極端な欧化主義に對する批判ということになっている。

三宅花圃は東京高等女学校という欧化教育のモデル校の在學生で、家庭環境も高官の令嬢としてベッド生活をし、馬車で夜会へも自由に参加するという、いわゆる明治時代の新しく欧化された女性であつた。

そのような環境に育っている三宅花圃の外見においては、主人公浜子におきかえることができる

17) 吉田精一「現代日本文学の世界」小峯書店 1972. P.67.

ものであつた。しかしそういう環境や風俗にとけこんだ欧化かぶれの浜子(女学生)に批判的になるのであつた。

「人にたかぶり生きの出来ないやうにして。温順な女徳をそんじないやうにしなければいけません。さうすれば子孫も才子才女が出来て。文明各国に恥ない新世界が出来ませう…」¹⁸⁾

このような「温順な女徳」の尊重は三宅花圃自身の主張でもあつた。彼女の生い立ちにおける旧幕臣の娘としての名残りは時代の最先端を行く風俗やその生活におかれながらもとけこめない一面があつたのである。また三宅花圃には中島歌子の歌塾(萩の舎)での傳統的教養と教訓の影響というものがあつたことで、それが彼女の一面をなしあげているとも考えられるのである。

「藪の鶯」は發表されるや好評を得て、江湖の若い女性に作家への希望をいだかせるようになった。いわゆる群小女流作家時代を作るようになり新しい知識女性による新しい小説の始めをかざつた先驅的なものとなつた。

「藪の鶯」の發表があつた年、東京高等女学校を卒業した木材曙(1871～1890)は「婦女の鑑」(明治22.2)を書いて読売新聞に連載した。33回にわたる連載小説は、女主人公秀子がケンブリッジ大学に留学して後アメリカで女工の技術を学んで帰国、工場経営者となる。

この小説は女性の職業的進出と女性の社会的地位向上という主題のみられるものである。女性の権利主張は経済的自立によるということをも18才の木材曙は考えていたのである。

小説としては未熟であり、文体・技法などの不十分さはあつたとしても、

「撞頭しつつかつた当時の日本の繊維産業とその生産で女・子供が使役されはじめた状態(中略)作家の若い女性らしい正義感によつて、厩大な数になりはじめた『女工』生活の非人間的な条件を觀察し、それへの抗議(後略)」¹⁹⁾

という面から見て、その題材は新しい近代的な発想といふことができるものであつた。

その他北田薄氷(1876～1900)田澤稱舟(1874～1896)大塚楠緒子(1875～1910)小金井喜美子(1870～1956)など高等女学校を卒業した才媛たちの作品が相次いで書かれた。

5. 近代前期女流文學の形成

「藪の鶯」の發表後、若い知識女性の小説が書かれていくうちに樋口一葉(1872～1896)の「闇

18) 作品の本文

19) 宮本百合子「藪の鶯」(現代日本文学大系5, 筑摩書房 1979) P.460～461.

櫻」(1892)も処女作として発表された。

当時、女流作家のほとんどは高等女学校出身の上流社会か富裕層の娘達であった。これは、

「当時はものを書くにも学問として伝統をふんだ教養が必要とされていたから女でそのような教養をそなえることの出来たのは、結局上流の子女たちばかりであった。」²⁰⁾

という理由からであった。一葉は父の生存時までは中流以上の生活をいとんでいたが父の死後は17才に女戸主となって母と妹の扶養という重荷を背負うことになってしまった。一葉は母の反対で女学校へは進学もできず小学校の学歴しかなかった。しかし和歌稽古だけはゆるされ、有名な中島歌子の歌塾(萩の舎)へ入塾した。それは彼女の学歴となり作家生活の糧となって大きく作用したのであった。上流階級の令嬢や婦人たちの集う萩の舎で一葉は三才女と呼ばれるその中の一人として和歌や古典を身につけていった。一葉は貧窮な没落士族の娘として上流階級の女の集る萩の舎では庶民グループに属するよりなかつた。

三宅花園の「蕨の鶯」が発表され稿料33円20銭が手に入ったことは一葉にはなによりも興味のある事実であったのである。一葉は文学への道と生活への道が共にえられることを望んでいたにちがいない。

三宅花園が坪内逍遙という文学者の校閲を受けて「蕨の鶯」を発表したごとく一葉も、1829年(20才)大衆作家半井桃水を師とすることができた。1892年(明治25年)頃の文壇は、坪内逍遙を先輩として尾崎紅葉、幸田露伴それからドイツ留学から帰った森鷗外などの少壮年の文学者が活気を呈してきたときであった。しかし戯作系統の作家も尙存在していた時で、小宮山天香、半井桃水、齊藤緑雨、村上浪六などが、紅露逍鷗のような学歴のある文学者ではなく、新聞と結びついて大衆作家の勢力をもっていた時代でもあった。その中の一人の半井桃水のことだから、樋口一葉の師は大衆作家としての校閲を行っていたのである。

樋口一葉は初作「闇櫻」を始め、いくつかの作品を発表していったが、文章はいたって古典的叙情的なものであった。それは萩の舎での和歌や古典物語の教養そのものであったからである。三宅花園のようないきいきした女学生の雰囲気にはたつたことのない一葉の作品であつてみればやむを得ない現象といえる。一葉は小説を書いてもその生活は苦しいばかりであった。

「我家貧困只せまりに迫りたる頃とて母君いといたく歎き給ふ。此月のかぎり山崎君に金十円返却すべき答なるを。我が著作いまだ成らず。一錢を得るの目あてあらず(中略)おのれ国子ある限りの衣類買入して、一時の急をまぬがばや…」²¹⁾

20) 宮本百合子「蕨の鶯」(現代日本文学大系5, 筑摩書店 1977) P.460.

21) 一葉の日記「しのふくさ」明25.8.28.

初期の四篇を発表してからは不本意ながら半井桃水と絶交するようになった。

一葉は経済的困窮が極度に迫ってきたため竜泉寺町のスラム街で商売を決心（1893）した。商売は9ヶ月程で失敗に終り、現実世界の虐げられた人間の痛ましさを痛感しただけで終った。しかし竜泉寺町は彼女の後の名作「たけくらべ」の背景となったところで、現実に対する観察力とか事物の客観的透視力といった作家的な成長をみたところでもあつた。

「雪の日」（1892）で『文学界』にデビューしてから、名作「たけくらべ」が完成されるまで樋口一葉は目にみえる発展ぶりをみせていた。それは前項でも述べた如く、戯作的大衆性を離れて真実の写実性へと推移をみせるものであつた。作品の真実性というものは。

「真実を訴へ真情をうつさば、一葉の戯著というともなどは値のあらざるべき。」²²⁾

と一葉自身がその日記に記した志向であつたように思う。

樋口一葉がいわゆる個性の現れる後期の作品群に到るまではわずか三年ほどの年月に過ぎなかつた。その間に一葉は平安物語風な戯作的雅文調から雅俗折衷体による写実というむずかしい過程をたどって、近代性へと近づいていったのである。

大衆作家半井桃水の指導をうけながら、一葉は処女作「闇櫻」を書いたが、その一部を引用してみると、

「隔ては中垣の建仁寺にゆづりて汲みかはす庭井の水の交はりの底きよく深く軒端に咲く梅 一木に両家の春を見せて薫りも分ち合ふ中村園田と呼ぶ宿あり…」²³⁾

これは中村と園田家の描写であつたがいかにも古典的和歌的なものであつた。しかし、

「行かれる物なら此のままに、唐天竺の果までも行つて仕舞いたい。ああ嫌だ（中略）つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情ない悲しい心細い中に、何時まで私は止められて居るのかしら。これが一生か、一生がこれか、ああ嫌だ、嫌だ、嫌だ。」²⁴⁾

という切迫した人間の絶叫に変つてきたのはそれから三年ほど後のことである。一葉の中には大きな変動が起つて来ていた。人生の不如意の軋轢や庶民の女の坐折などが大きく作用して作品に現れるようになった。

22) 日記「禁のした艸」明24.11. 和田芳恵編「樋口一葉」（明治文学全集30）筑摩1972.

23) 作品「闇櫻」の冒頭文。

24) 作品「にごりえ」第五章

一葉の小説は他の女流とはあまりに違った苦痛の実生活環境の中で作られたものであったため、そこには女性のリアルな苦悩を訴えるものがあつた。それは女性の自覚を促す暗示でもあつたことで、近代的自我への接近とみることができる。

当時の知的上流層の女流がややもすると余技的に小説を書いていた時に、樋口一葉は、明治前期の女流文学の形をつくりあげていたとみるべきである。いわゆる前期女流文学の形成は樋口一葉に収斂されるといえるのである。

樋口一葉の文学の特質を、若い女の社会的壓力との葛藤であり、作中人物は作者の生活の不如意と苦痛を訴えるものであるとみると、近代初期日本女流文学の形成は、未熟ながらも近代性への接近とみるべき女性の悩みに帰結されると思うのである。

Ⅲ．結 論

明治期日本の近代的開化は功利的啓蒙にあつた。その政策の一環として、女性教育にも力が入られ、女性は大いに知識化されていった。

中島湘煙は明治の新しい教育をうけた最初の女性として、女権を主唱、時代の急激な変遷の上に男女平等を唱えた。彼女は演説により、文筆によって主張したが、小説も書いて時代の推移を反映させたのであつた。

次の三宅花圃の「藪の鶯」の発表は、湘煙の戯作風な漢文調とは違った新文学の形態をそなえ、極端な欧化主義を批判するような傾向を示してきた。

それ以来知識女性、すなわち経済的にめぐまれて教育をうけることができた女性の小説が群小をなして発表されていった。中でも樋口一葉の存在は大きく浮きあがってきた。25才で生を終えた一葉の作品は、それまでの女流にはみられなかつた写実性という人間真相を描く鋭利な観照の文学となっていたのである。

数世紀のあいだとだえていた女流文学は新しい形成をもつてまず近代初期を飾つたことになる。発生当初は、中島湘煙の漢文調のむずかしい戯作風のものや樋口一葉の空想的、平安物語風の雅文調のものなど古典の復活とみられるものにすぎなかつた。ただ新教育の真つただ中を歩いていた三宅花圃の「藪の鶯」だけは時代を生々と写した、当時の特殊の風俗といわれた女学生の生態の描写であつたのである。そのような実感に富んだ作品ではあつたが、数年後、樋口一葉の後期傑作「たけくらべ」や「にごりえ」などの発表による写実性には及ばぬものであつた。

要するに樋口一葉は当時女流文学が、ややもすると上層階級の余技のようなものになりかけていた時に、それとはかけ離れた、文学界同人達の近代的思想の影響をうけていたのである。即ち封建

的残滓の打破と自我の拡充という近代性の目覚めを主張する文学界同人達の思想に呼応することのできる作品を書いていたのである。

おぼつかない初期の過程をたどってきた女流文学が、近代的自我の覚醒に接近するものとなってきたことは、当時の文壇が写実主義浪漫主義と積極的な歩みをしているのには及ばぬものであったにしても、女流文学としての特色を持って形をなしたとはいえるのである。

その後（樋口一葉の死後）女流の小説は激減していつて、明治末期に雑誌『青鞥』を中心に第二の跳躍がみられたのである。この『青鞥』中心の女流文学は、女性の自覚と自我の確立を叫び、既成倫理の抑圧と抗争することであった。与謝野晶子や平塚雷鳥はその思潮の中心となっていたいわゆる「恐れない女」²⁵⁾の役割をなしたともいえる。

このような明治末期の日本女性解放運動や力強い女流文学の成立を考えると、初期の女流文学は決して主張的なものとはなりえなかった。相馬御風は。

「結局最後の旧き日本の女は一葉である。ほんとうの日本の女の新しい自覚は一葉が思い詰めた境地を徹底的に経なければ到底得る事は出来ぬ。一葉は矢張り The last woman of old Japan であった。」²⁶⁾

といつている。樋口一葉が作品を通して反抗し絶叫した女の訴えは、幾百年となく虐げられてきた日本の女の悲哀であった。この古い女の問題を解く女性の新しい自覚は、一葉の訴える境地を経なければならぬとみられるとき、初期女流文学は、次代の女性解放や自我の確立をはかる女流文学の成立には、土壌的な役割をなしたと同時に、女性の問題意識を提示する役割もあつたといえるのである。

25) 吉田精一「日本女流文学史」(近世・近代編)同文書院 1975. P.140.

夏目漱石の「彼岸過迄」にある句。高田瑞穂は「強い因襲に縛られた日本の社会において、女流作家たるべきものは当然『恐れない女』である必要があつた…」と述べている。

26) 相馬御風「樋口一葉論」(現代日本文学大系5, 筑摩書房1977) P.428.

〈國文抄錄〉

近代日本女流文學의 發生

日本女流文學은 平安貴族文學時代를 華麗하게 裝飾하여 男性을 制壓하고, 다음 鎌倉時代로부터 江戸時代에 이르는 數世紀동안의 封建體制下에서는 거의 그 자취를 감추었다해도 過言이 아니다.

明治(1868)時代에 이르러서 그 沈黙을 깨고 女流文學은 다시 誕生을 했다고 할 수 있으나 그것도 20年이란 세월이 經過하지 않으면 안 되었다.

當時는 日本社會가 近代化를 위해 功利的啓蒙과 富國強兵을 무엇보다도 시급한 要求로 삼고 있었던 때였으므로 文學의 近代化는 오랫동안 無視되어 왔다. 모든 功利的인 면이 開化되어 가고 있을 때 文學은 江戸時代의 戯作風과 社會變遷을 反映하는 政治的인 小説만이 旧態依然하게 남아 있었을 뿐이었다.

이와 같이 文學을 제외한 모든 면에 있어서의 社會는 눈부시게 變動해 가고 있었던 1882年(明治15年), 民權運動과 때를 같이하여 中島湘煙은 妙令의 知識女性으로서 男女平等을 主唱하였다. 그는 演說로 大衆앞에 서서 女權을 부르짖고, 論說文으로 女性을 啓蒙했다. 그리고 小説도 썼다. 그러나 그 小説은 어려운 漢文調의 것으로 當時의 政治的 社會相을 나타내는 것으로서 女流文學의 發生을 뜻했을 뿐이라 하겠다.

明治維新으로부터 18年後인 1885年에 坪内逍遙는 東京大學 出身인 文學士로서 新文學의 革新을 主唱하게 되었다. 이것으로 말미암아 卑賤한 業으로 여겨졌던 文學의 價値觀이 改新되었다. 逍遙는 「小説神髓」와 「當世書生氣質」을 발표하여 新文學論과 新小説을 보여주어 文壇에 衝擊을 주었다.

1885年(明治18年)은 女性教育에도 큰 發展이 있어, 知的 女性이 成長되었던 時期이기도 했다.

當時 東京高等女學校의 學生이었던 三宅花圃는 逍遙의 「當世書生氣質」을 읽고 模倣하여 女學生의 生態를 實感있게 描写한 「菝の鶯」(1888)을 發表하였다. 이것은 많은 女學生을 刺戟하여 群小女流作家를 배출하기에 이르렀다.

「菝の鶯」는 새로운 小説이라고 볼 수 있는 最初의 近代女流文學이었던 것이며 男性과 같은 위치에서 小説을 쓸 수 있었던 知的 向上的 結果였다고 볼 수 있다.

많은 群小女流作家의 出現은 教育이 可能했던 上流層과 富裕層의 子女들 뿐이었으며 그것은 當時로서는 피할 수 없는 여건이었다 하겠다. 그 中 樋口一葉만은 貧困層에 속하는 庶民으로

서, 古典文學의 素養 만으로 小説을 썼고 短期間(約 4年間)에 그의 文學은 円熟하여 傑作을 쓰게 되었다. 樋口一葉는 貧困을 克服하고 庶民女性의 苦惱를 體驗하며 人生의 實相을 描写하는 寫實文學에 도달하게 되었다.

이와 같이 近代初期女流文學이 近代性으로의 接近을 보이며 形成되어 가는 過程을 本稿는 追究해 본 것이다.

參 考 文 獻

- 「国文學 解釋と教材の研究」學燈社 1980。(25卷 15號)
 「国文學 解釋と鑑賞」至文堂 1974。(39卷 13號)
 「国文學 解釋と鑑賞」至文堂 1968。(4月特集増大號)
 「国文學 解釋と鑑賞」至文堂 1981。(56卷 4號)
 中村光夫「明治文學史」(筑摩叢書 9) 1979.
 中村光夫「日本の近代小説」岩波書店 1976.
 前田愛「樋口一葉の世界」平凡社 1978.
 吉田精一「日本女流文學史」(近世近代編)同文書院 1975.
 吉田精一「現代日本文學の世界」
 「近代文學鑑賞講座」3, 角川書店 1958.
 勝本清一郎「近代文學ノート」みすず書店, 1979.
 「現代日本文學大系」5, 筑摩 1977.
 中村光夫「文學をどう讀むか」新潮社 1980.